一般口演 9

舌の違和感を訴える患者に2回鑄造法を適用した一症例

Double-casting method applied to the patient with tongue discomfort

皆木省吾, 白井 肇*, 瀬島淳一**, 谷本裕子*, 萬谷祐佳*, 鈴木雄一郎*

Syougo Minagi, Hazime Shirai*, Junichi Sejima**, Yuuko Tanimoto*, Yuka Mantani*, Yuuichirou Suzuki*

岡山大学大学院医歯学総合研究科 咬合・口腔機能再建学分野

*岡山大学歯学部附属病院 第二補綴科

**岡山大学歯学部附属病院 技工室

Department of Occlusal and Oral Functional Rehabilitation, Okayama University Graduate School of Medicine and Dentistry,

*Department of Removable Prosthodontics, Okayama University Hospital of Dentistry,

**Room for Dental Laboratory, Okayama University Hospital of Dentistry

I. 目 的

補綴物装着後に舌の違和感を訴える患者のなかには、咬合関係や形態に非常に敏感な患者がおり、新たに行われた補綴処置により、舌の違和感が発症したと訴える患者が存在する。補綴物の咬合関係や形態の微妙な変化を感じるとこの様な患者に対して、鑄造歯冠修復を行う際には、まず暫間補綴物を作製し、舌の違和感の消失後、暫間補綴物の咬合関係や形態を高い精度で最終補綴物に反映する歯冠修復法の確立が望まれる。

このような症例に対して我々は、平成8年以来、無意識下において生じるグライディング時等の滑走経路が咬合面に再現され得る2回鑄造法による補綴物を作製することによって対処し、非常に良好な結果を得ている¹⁻³⁾。今回その一症例について報告するとともに、その作製法の手順ならびに作製時の注意事項について詳細に紹介する。

II. 方 法

症例の概要

患 者：67歳、男性

主 訴：舌の違和感

現病歴：長期にわたり放置していた下顎左側第二大臼歯欠損に対して、約1年前に、近遠心に隣在する第一第三大臼歯を支台歯とするブリッジを装着

した。その後、舌の違和感を自覚し始めたため精査加療を希望し来院

既往歴：神経内科に通院中（筋性頭痛）以外に特記事項なし

現 症：他覚的に舌に異常所見は認められない。また、中心咬合位での咬合接触に特に異常は認められない。

診断および治療方針：舌の違和感の原因は不明であるが、下顎左側臼歯部のブリッジの装着以降症状が出ていることから、一度この臼歯部ブリッジを除去し、暫間補綴物に置換する。症状が軽快する様であれば、暫間補綴物の咬合関係や形態を高い精度で最終補綴物に反映する2回鑄造法を用いてブリッジを再製する。

以下、2回鑄造法を用いた鑄造補綴物の作製手順について説明する。

1. クリアランスを1.2～1.5mm程度確保して支台歯形成を行い、通法に従い印象採得した後、作業模型を作製する。1回目の鑄造時は咬合面以外の部分を、隣接面のコンタクト部分まで含めて作製し、レジンならびに2回目の鑄造物を維持するために咬合面部には直径0.7mmのレディキャストイングワックスを付与する（図1-A）。
2. 鑄造は遠心鑄造が適しているため、遠心鑄造用にスプルーイングを行い、埋没はGC社製クリストバライトミクロを用いて行う。金属は、金銀パラジウム合金

図 2 回鑄造法による鍛造冠の模式図
 A：ベースクラウンは咬合面に維持構造を付与した鑄造冠である。隣接面のコンタクト部分はベースクラウンに含む。
 B：ベースクラウンは咬合面は、口腔内に置いて常温重合レジン进行盛り上げ、レジンの硬化前にさまざまな滑走運動を行わせ、機能的な咬合面を形成する。

またはTYPEⅢの金合金を用いる。

- 咬合面に常温重合レジンであるGC社製ユニファーストトラッドを築盛する。口腔内において隣接面のコンタクト等の調整を行った後、口腔内で常温重合レジン进行盛り上げ、レジンの硬化前にさまざまな滑走運動を行わせ、機能的な咬合面を形成する（図1-B）。口腔内から取り出した時は、咬合面が面接触になっているので、必要に応じて点接触へ形態修正後、再度咬合面の確認を行う。
- このベースクラウンを仮着して経過観察を行い、必要に応じて咬合調整等を行う。口腔内に仮着することで、睡眠時ブラキシズム中などの対合する咬頭の滑走面等も形成されると我々は考えている。咬合状態が安定した時点でクラウンを撤去し、常温重合レジンと金属の境をワックスで埋めた後に、瞬間接着剤を用いてレジン部分の表面処理を行い研磨しを確保し、レジン部分にスプルーイングを行う。2回目の鑄造用の埋

没材は急速加熱型リン酸塩系埋没材であるGC社製セラベストクイックを用いる。埋没後ファーンズ温度800℃にて、2回目の鑄造を行う。鑄造後、スプルーを切断して、咬合面以外の部位を研磨する。咬合面はガラスビーズによるサンドブラスト後、仕上げ用のシリコーンポイントで軽く研磨する。

- 通常我々は、調整の完了したクラウンを朝回収し、その日の午後に2回目の鑄造を終えて装着を行うことで良好な結果を得ている。

Ⅲ. 結果および考察

本症例は、暫間補綴物に置換した状態で舌の違和感ならびに頭痛が軽快したため、2回鑄造法を用いて最終補綴物を作製し装着した。最終補綴物装着以降も同症状の再発はなく経過良好に経過している。

他覚的に舌に異常所見が認められないにもかかわらず、舌の違和感を訴える患者の対応には苦慮することが多い。その理由として、舌の違和感を訴える患者は、いわゆる舌痛症と診断され、違和感の原因を単純に心理的因子のみと判断して、心理療法や抗うつ薬投与などの治療が行われていることがあげられる。抗うつ薬のほとんどが、唾液分泌低下を来すために、唾液分泌低下が関与している舌の違和感などは、より症状を複雑にしているのが現状である。したがって、このような治療で治癒あるいは軽減しない症例も多い。

舌の違和感の原因には、唾液分泌の低下ならびに心性のほかに、最終補綴物の咬合関係や形態の微妙な変化があげられる。

我々は以前より、新たに装着した補綴物によって舌の違和感が発症したと訴える患者に対しては、一度装着した補綴物を除去し、暫間補綴物を装着した状態で、経過観察を行い、その補綴処置が舌の違和感の原因か否かの判定を行ってきた。症例のなかには、暫間補綴物を装着することによって、舌の違和感が消失する症例が存在する。しかしながら、暫間補綴物を最終補綴物に置換する過程が非常に困難であった。そこで、我々は平成8年以降この様な症例に対して、2回鑄造法を用いて、最終補綴物を作製し、良好な結果を得ている。

Ⅳ. 結 論

2回鑄造法が普及すれば、舌の違和感を訴える等の咬合接触到に敏感な患者に対して鑄造歯冠修復を行う際において、補綴領域を専門としない歯科医師においても比較

的容易に対応することが可能となり，歯科医師側のストレスの減とともに，舌の違和感を主訴にドクターズショッピングする患者が減り，歯科医師と患者との信頼関係の向上に繋がるものと考えられる。

V. 文 献

- 1) Minagi, S., Tanaka, T., Sato T. et al: Double-casting method for fixed prosthodontics with functionally generated path. J Prosthet Dent 79, 120-124. 1998.
- 2) 皆木省吾，赤松由崇，佐藤隆志：暫間補綴物の咬合を精密に再現する二回鑄造．補綴臨床，32：218-219，1999.
- 3) 白井 肇，皆木省吾，原 哲也ほか：機能的咬合を精密に再現する 2 回鑄造法の術式改良．補綴誌，45：798，2001.